

〔東洋の古代美術展によせて〕

韓国への旅

— 中央博物館の仏像を訪ねて —

この夏、マスコミでも報道された韓国国立中央博物館の新館開館記念展に臨むため、何度目かの韓国旅行をしました。ソウル市の光化門に位置するこの新館は、日本の統治時代に、朝鮮総督府々庁として建設され、韓国の独立後は中央庁として行政のシンボルとされて来た有名な建物です。韓国は、新しい民族史を創造する意味で、この建物の使用を中止し、この八月、国立中央博物館として装いも新たに開館しました。

青銅のドームを持つ、西洋建築様式の新館は、二階中央ホールを見ると、シャンデリアのある豪華な広間で、床は、色石のモザイク模様による幾何学的構成の中央に太陽をデザインした、現代的感覚に溢れるものです。五階建ての二・三・四階に当てられた展示室は、三十近くもあるというのですから驚きます。

その内、「仏教彫刻室」には、二階考古部の一室が当てられて、三国時代から李朝末までの仏像が揃っていますが、今回は、三国から李朝までの小金銅仏が、コの字形の

ウィンドーに美しく陳列され、有名な三国時代の二体の弥勒半跏像と統一新羅から高麗までの大きな石造仏群・鉄仏群がケースに入れられずに露出陳列されているのは圧倒される思いでした。

今日は、その中から、特に日本の仏像とも関連の深い何点かを中心に紹介させていただきます。

この博物館には、韓半島の仏像彫刻の中で最も古い銘文を持つ、高句麗の小金銅仏（図1）があります。1963年に慶尚南道で発見されましたが、古新羅の領域で出土した初めての三国期銘金銅像であり、その帰属国が北の高句麗であったという現実が、一層学術的関心を刺激することになったのです。光背・仏身・台座共に一体として鑄造された。金色に輝く如来立像です。光背の後ろに彫られた銘文によりますと、延嘉7年に、高句麗の渠浪というところの東寺主敬とその弟子僧である演など、師徒四十人が賢劫千仏を共同造成したが、この像はその第二十九仏として造られ、比丘□□が供養する次第であるとしています。賢劫

図1 金銅如来立像



図2 金銅菩薩立像

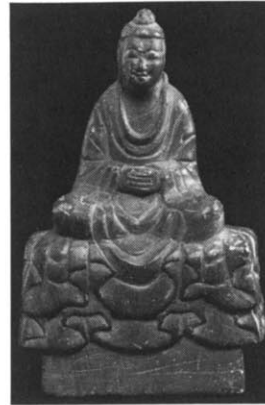


図3 蠟石製釈迦如来坐像



図4 弥勒菩薩半跏像



図5 弥勒菩薩半跏像

千仏は現在の千体仏を指しており、過去・現在・未来の三劫にわたり各千仏の出世があったと言われ、千仏信仰と言えば現在の千体仏信仰を指しているわけです。

全高16.2cm。その内、仏身の高さ9.1cm。大変素朴な造形を見せていますが、蓮華形台座や衣端を体側に張り出した仏身・火焰光背の様式考察から、銘文の延嘉7年は599年に当たると考えられ、中国北魏仏の様式を受けていることが分かります。元興寺や法隆寺の日本最初の仏像も北魏様式によるものと言われているのですが、それが、このような韓半島の仏像を仲介として採り入れられたのか、中国からの直接の影響であるのか、永年の問題点でありまして、この像のような北魏式の、出来れば、もっと大きな仏像が今後韓半島で発見されることが望まれるのです。

北魏式は、他に、天衣の先を体側で魚のひれ状にピンと張り出させ、更に天衣を膝前でX字状に交叉させた高句麗系6～7世紀の菩薩像（図2）に見られ、日本にもこの形式が伝わっています。

それと関連して、百済の古都扶余の軍守里庵寺から出土した6世紀後半の蠟石製釈迦如来坐像（図3）は、両肩をおおう衣の着方と衣の裾を台座の上に垂らす坐り方が、7世紀前半のわが法隆寺釈迦

如来像と共通しており、高さ13.4cmと小像ながら重要なものです。

同じく扶余の窺岩面で発見された高さ21.4cmの細身の菩薩立像は、複雑な宝冠の形や前面に長く垂らした璎珞（ようらく＝胸飾り）の形式が隋様式を思わせ、島根県鰐淵（がくえん）寺の同じく7世紀の菩薩像と類似しています。

博物館の仏像彫刻の中で最も有名なのは、どちらも三国時代で百済か、新羅かと言われている二体の弥勒菩薩半跏像（図4、5）です。特に一体（図5）は広隆寺の赤松製弥勒菩薩半跏像を韓国製と見る意見の有力な証拠作品として知られております。こちらを百済製と見、もう一方（図4）を古新羅製とする見方が一般的となっていますが、偶然にも同程度の大きさの同じポーズの仏像が伝わっているわけで、この二像の研究いかんにより、三国時代の仏像様式が決定されると言えるくらい重要な作品でありましょう。

次の統一新羅時代の仏像とわが国の仏像との関連はまだ明確にされていませんが、その中で、慶州の皇福寺石塔内より発見された黄金製の如来立像と如来坐像は、韓国にも少ない金の仏像として珍しいものです。（村田靖子）

季刊 美のたより No.77

昭和61年 11月 21日

発行 大和文華館